

# 日本宋代文学学会 第三回大会

## —プログラム—

- 日時： 2016年 5月28日(土) 9:30開場 10:00開始
- 会場： 九州大学伊都キャンパス 伊都ゲストハウス1階会議室 (p.3地図参照)
- 参加費： 1,000円

### 午前の部 10:00~11:40

- 9:30 開場／受付開始  
10:00 主催校あいさつ 九州大学 東 英寿  
会長開会あいさつ 大阪大学 浅見 洋二

(I) 10:10~10:40 : 北宋古文復興における「怪奇」の変遷

広島大学大学院 渡部 雄之  
司会：佐賀大学 谷口 高志

(II) 10:40~11:10 : 黄州左遷期の蘇軾について

—「寒食雨二首」に見える「死灰」の考察を中心に—

東北大学大学院 室 貴明  
司会：金沢大学 原田 愛

(III) 11:10~11:40 : 陸游「釵頭鳳」詞と沈園故事

—宋詞と“Culture of Romance”—

日本学術振興会特別研究員PD 甲斐 雄一  
司会：岡山大学 藤原 祐子

—昼休み(11:40~13:00)—

- 理事会 11:50~12:15
- 評議員会 12:15~12:45

### 午後の部 13:00~17:45

(IV) 13:00~13:30 : 元代以降における『太平広記』の受容状況について

—『太平広記』の一般名詞化の可能性—

京都府立大学 西尾 和子  
司会：東洋大学 坂井 多穂子

(V) 13:30～14:00 : 劉辰翁の『鞞川集』評について —「漸可語禪」を中心にして—  
神戸市外国語大学 紺野 達也  
司会: 岡山理科大学 奥野 新太郎

(VI) 14:00～14:30 : 日本詩話中の楊萬里接受研究  
西南大学 楊 理論  
司会: 早稲田大学 内山 精也

(VII) 14:30～15:00 : 范仲淹の神道碑銘をめぐる周必大と朱熹の論争  
—歐陽脩新発見書簡に着目して—  
九州大学 東 英寿  
司会: 同志社大学 副島 一郎

—休憩15分間—

(VIII) 15:15～17:00 : シンポジウム

JSPS科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」主催

第4回宋代文学研究国際シンポジウム

## 文学テクストの編纂と流伝

司会: 大阪大学 浅見 洋二

1 歐陽脩的文学評價論 —以宋人文集流傳演變的内容為主所作的探討—  
台湾師範大学 王 基倫

2 《歐陽文粹》編纂之意義  
台湾大学 謝 佩芬

—休憩10分間—

3 行記與文集編纂 —范成大、陸游、周必大行記與筆記探討—  
東華大学 張 蜀蕙

4 詞譜の発展と唐宋詞研究  
立命館大学 萩原 正樹

■ 総合討論 ■ 16:35～17:00

■ 総会 17:10～17:45



# — 発 表 要 旨 —

[午前の部]

## I. 北宋古文復興における「怪奇」の変遷

広島大学大学院 渡部 雄之

唐宋の古文復興における重要な問題の一つに、「怪奇」がある。中唐では、韓愈及びその門下が、規範からの逸脱である「怪奇」に価値を見出し、すでに定着した様式から外れた、あるいは従来無かった独自の表現を追求した文を作った。一方宋代では、初期の柳開、王禹偁から中期の欧陽脩等に至るまで、主要な古文家は往往「怪奇」に反感を示し、古文の復興は全体としてこれを否定する方向で展開した。

宋人による「怪奇」の否定の代表的事例としては、嘉祐二年（一〇五七）に欧陽脩が権知貢挙として統轄、実施した科挙において、当時太学で流行していた所謂太学体で書かれた答案を斥け、明快達意の文章を採ったことが挙げられる。太学体は、それまで盛行していた西崑体に代わり、古文が中心となっていくという文学の流れと軌を一にして、慶暦（一〇四一～一〇四八）頃姿を現した。以後、嘉祐二年に至るまでの間、「怪奇」は太学体が中心となっているように見受けられる。以上のように、唐代から宋代の古文復興を概観すると、「怪奇」を重視する時代からそれを否定する時代へという大きな流れとともに、太学、科場へと「怪奇」を語る場が限定されていくという変化が見られる。

今回は、唐宋の古文家、特に嘉祐二年の科挙に至るまでの宋人の言辞を追いつつ、各時期に「怪奇」がどのように語られたか、そしてこうした変化は何故起こったのかについて発表したい。

## II. 黄州左遷期の蘇軾について

—「寒食雨二首」に見える「死灰」の考察を中心に—

東北大学大学院 室 貴 明

蘇軾(1037～1101)は、「烏台詩案」と呼ばれる筆禍事件を受け、元豊三年（1080年）に黄州へと左遷させられた。官僚としての蘇軾は、黄州で低い地位に甘んじたが、黄州左遷期には前後「赤壁賦」や「念奴嬌 赤壁懷古」を創作するなど、文学の方面では実りの多い時期でもあった。左遷一年目の元豊三年に書かれた「初到黄州」では、黄州のもの珍しい風物を楽しんでるが、元豊五年に書かれた「寒食雨二首」では、政治にも参加できず故郷にも帰ることのできない心情を吐露している。

本発表では、「寒食雨二首・其二」の末句「死灰吹不起」に着目する。なぜなら該句の出典が、歴代の注釈者によって異なっているからである。『漢書』を出典とする注、『晋書』を出典とする注、『文選』「風賦」を出典とする注、またそれらを全て非とする注もある。これらの注を受け、先行研究ではおおよそ『漢書』を出典とする注に従い、蘇軾には再起の心がな

いと解釈されてきた。

しかし、近年上梓された『蘇軾全集校注』では、該句の出典を『莊子』齊物論篇としている。確かに、蘇軾の詩の中には、『莊子』齊物論篇にある「死灰」を典故とした作が散見される。

そこで、本発表では蘇軾詩における「死灰」および「灰」の用法を検討し、該句を如何に解釈すべきかを示していきたいと思う。

### Ⅲ. 陸游「釵頭鳳」詞と沈園故事 — 宋詞と“Culture of Romance” —

日本学術振興会特別研究員PD 甲斐 雄一

紹興沈園を舞台に陸游「釵頭鳳」詞をめぐる悲恋の故事は、つとに南宋末の陳鵠『耆旧続聞』や周密『齊東野語』に端を発し、呉熊和氏が「釵頭鳳」詞と沈園故事との関係を否定して以来（「陸游『釵頭鳳』詞本事質疑」、『呉熊和詞学論集』、浙江大学出版社、1999年）、今日の学界でも論争の中心となっている。確かに、陸游には沈園において感傷にひたる詩作があるものの、「釵頭鳳」には作詞の時間や背景について説明はなく、この詞が沈園故事を「本事」として説明されるのは南宋末に至ってからである。では何故、詩ではなく詞が悲恋の故事と結びついたのか。

Stephen Owen氏は、中唐期、とりわけ8世紀末から9世紀初めにかけて、中国の“Culture of Romance（恋情文化）”が大きな変革を遂げたことを論じている（「Romance」、『The End of the Chinese 'Middle Ages'』、Stanford University Press、1996年）。本発表では、上述の疑問を出発点とし、“Culture of Romance”という枠組によって「釵頭鳳」詞と沈園故事について分析を加え、そこから詞というジャンルの性格、宋代以降の士大夫文化（雅）と民間文化（俗）の関係について検討を試みたい。また、“Culture of Romance”という枠組がジャンルを超えた新たな文学史を構築しうる可能性について提示してみたい。

#### [午後の部]

### Ⅳ. 元代以降における『太平広記』の受容状況について —『太平広記』の一般名詞化の可能性—

京都府立大学 西尾 和子

唐代伝奇小説の代表的作品である元稹の「鶯鶯伝」は、「会真記」或いは「伝奇」とも称される。「鶯鶯伝」という題は、北宋に成立した『太平広記』に「鶯鶯伝」の題で収められていることに拠る。「会真記」という題は、主人公である張生が崔氏の娘鶯鶯に贈った「会真詩」に由来する。「伝奇」の題は、南宋・曾慥の『類説』に採録されている『異聞集』では「伝奇」という題で収められているからである。現在では、「鶯鶯伝」の本来の題名は「伝奇」である

と考証されている。ただ、些か紛らわしいのは、「伝奇」という題名を持つ書物が他に存在することである。北宋の陳師道が「伝奇は唐の裴鉞が著した小説である」と言うように、『伝奇』は、裴鉞が自身の作品である「聶隱娘」や「崑崙奴」などの物語をまとめた書物に名付けた書名である。ちなみに、唐代小説を伝奇と呼ぶのは、この裴鉞『伝奇』に拠っている。そうすると、「伝奇」は書名であり、作品名でもあり、さらにジャンルをも表す名称ということになる。

では、北宋に成立した『太平広記』が、『太平広記』という書名ではなく、「小説」という名称で呼ばれていたとしたら、或いは、『太平広記』が書名ではなく、ジャンルを表す名称として用いられていたとしたらどうだろうか。

本発表では、一般名詞であるとともに、芸能の名称でもある「小説」という語が、『太平広記』を特定の指す事例を通して、この問題について検討したい。

## V. 劉辰翁の『鞞川集』評について —「漸可語禪」を中心に—

神戸市外国語大学 紺野 達也

宋末元初の劉辰翁（号は須溪）は唐宋の別集に多くの評点を施した。それらの別集の一つに盛唐の王維の詩集がある。この劉辰翁の評点は王維の詩にまとまった形で行われた最初の文学批評であり、王維研究、特に宋元期の王維受容史にとって重要な資料と言える。

劉辰翁は、王維が裴迪と唱和した『鞞川集』にも評点を施している。なかでも興味深い評は「辛夷塢」の王維詩に付した「其意亦欲不着一字漸可語禪」だろう。なぜならば、第一に劉辰翁はこの他に王維と仏教（禪）とを直接的に結びつける評を遺していないからであり、第二にこの評は「辛夷塢」詩あるいは『鞞川集』と禪を明確に結びつけた、かなり早い時期の言及であると考えられるからである。そして、王維の代表作とされる『鞞川集』と禪に関する多くの言及、たとえば明・胡応麟『詩藪』や現代の研究成果などを考慮する時、この評はやはり検討を加える必要があるように思われる。

本発表では、『鞞川集』に対する劉辰翁の評点、特に「辛夷塢」詩への評とその背景について、その他の別集における劉辰翁の評点や彼の別集、さらには宋代の文学批評における詩と禪などに着目して考えていきたい。

## VI. 日本詩話中の楊萬里接受研究

西南大学 楊 理論

楊萬里“誠齋體”見重於當代，但在明清卻屢受非議，評價不高。這與東瀛楊萬里接受恰成對照。江戶時代，楊萬里頗受日本宗宋詩派如市河寬齋的江湖詩社、大湊行的二瘦詩社的推崇。楊萬里“誠齋體”的靈動活潑、俚俗幽默等特點，被諸多宗宋詩話提倡推廣，對江戶詩壇產生了深遠影響。本文擬對江戶時期的日本詩話

中楊萬里的相關評介展開研究，並與同時期清代詩話楊萬里評價相互比較發明，歸結中國與日本楊萬里詩學接受的不同特點及其原因所在。

## VII. 范仲淹の神道碑銘をめぐる周必大と朱熹の論争 — 歐陽脩新発見書簡に着目して —

九州大学 東 英 寿

歐陽脩が范仲淹のために作成した「資政殿学士戸部侍郎文正范公神道碑銘」の文字の一部（合計百三字）を、後に范仲淹の息子である范純仁が勝手に削除した。このことをめぐって、『歐陽文忠公集』を編纂した周必大と朱子学の祖・朱熹の間に論争がある。論争における二人のやりとりを考察すると、発表者が二〇一年に日本中国学会で報告した歐陽脩の新発見書簡について、しばしば言及していることに気づく。

歐陽脩の新発見書簡は全てで九十六篇が確認されており、周必大が編纂した『歐陽文忠公集』には採録されず、今日まで全くその存在が知られていなかったものである。にもかかわらず、周必大と朱熹がやりとりした書簡の中でそれらに言及しているということは、新発見書簡が南宋当時には確認されていたことを意味しており、二人がそれらの書簡に対してどのような見方をしていたかを窺うことができ非常に興味深く、しかも新発見書簡に着目すると二人の論争を具体的に跡づけることができるのである。

そこで本発表では、発表者が発見した歐陽脩の書簡を手がかりとして、「資政殿学士戸部侍郎文正范公神道碑銘」をめぐる周必大と朱熹の論争を跡づけながら考察し、あわせて歐陽脩新発見書簡の意義について考えたい。

\* \* \*

JSPS科研費「宋人文集の編纂と伝承に関する総合的研究」主催

● 第4回宋代文学研究国際シンポジウム ●

### 文学テキストの編纂と流伝

大阪大学 浅見 洋二

文学作品はどのように伝承され、整理されたのか。文学の研究がつねに立ち返るべき重要な問いのひとつである。宋代のさまざまな文学テキストに即して総合的に考えてみたい。

#### 1 歐陽脩的文学評價論 ——以宋人文集流傳演變的内容爲主所作的探討——

台湾師範大学 王 基倫

歐陽脩的文壇地位崇高，自不在話下。然而，兩宋文人如何評價歐陽脩的文學成就？自北宋至南宋的評價內容是否有些轉變？迄今為止，似乎尚缺乏全面性的討論。本文擬以兩宋文人文集為範圍，討論歐陽脩評價的相關問題。文分四節：一、歐陽脩身前蘇洵、蘇軾父子對他的評論，二、歐陽脩身後韓琦、王安石、曾鞏、范鎮、蘇軾、蘇轍等人祭文、墓誌銘、神道碑的評論，三、南宋筆記對歐陽脩的評論，四、兩宋評論方向的變遷，以及如何歸納出正確的歐陽脩的文學評價論之可行性分析。上述討論內容，涉及評論者的身分立場、評論文章的文體性質和流傳過程的文字版本正偽等問題，亦將一併納入討論。

## 2 《歐陽文粹》編纂之意義

台灣大學 謝佩芬

《歐陽文粹》乃現今所能得見之最早歐陽脩古文選本，於歐文之傳播、接受，及兩宋古文承襲、創作頗具重要性。編選者陳亮稱許歐文「根乎仁義而達之政理，蓋所以翼《六經》而載之萬世者也」，有意以其「通於時文者」「明先王法度」。本文細審該書，詳察各篇內容、筆法，以探求其編纂規準與意義。獲知：所收論、書、劄子、奏狀、序、記、雜著、碑銘、墓銘、墓表非盡為科舉需試文類；內容除論及三代先王政法、六經義理外，亦兼涉道文理念、為學、取士、遇合等主題，而各文所涉對象、書寫時空常與慶曆新政相關；寫作筆法則多架構謹嚴，層層推論，紆徐詳密，各有精妙獨到處。該書所選篇章，部分為後世共認之歐公佳作，兼為各選集屢收之什，足證其編選眼光穩確。是書亦極可能為最早之單一文人選集，而以「文粹」名之者，其後此類「文粹」書籍迭現，蔚為風潮。版本、文獻價值之外，《歐陽文粹》之編纂意義實不容忽視。

## 3 行記與文集編纂 — 范成大、陸游、周必大行記與筆記探討 —

東華大學 張蜀蕙

南宋行記書寫，長途舟行累日為記，在陸游、范成大、周必大等人為之，可以捕捉途中光影、事件，「累日記之」的行記，呈現生活感受，沿程自然風光、景物、人事之外，天候與交通每日面對的問題，陸行則道路鋪石、積泥，舟行則問津換渡、風波、水位、水勢高下急緩，無不關注。范成大、陸游以專志的方式呈現。這種傾向寫實的筆法，充滿了訊息、交通指南、考查山川風物與生活滋味的書寫，與詩歌表現不同。本文對於范、陸二人行記《入蜀記》、《驂鸞錄》、《吳船錄》、《攬轡錄》，作者何時有結集的準備，是在旅途開始即有意為之？或隨旅途結束已經完成？旅程中以日記體的方式，是當下的書寫？是否經過日後整理？書寫與結集的過程令人感到興趣。一方面與宋人好一官一集，將行役一處的詩文結集略有不同，行記的歷程即是旅途，書寫初稿是在動態中完成。這方面的資料有私人心情寫照，也有著現實的記錄與指南的作用。這一類的作品應該是比較容易結集。對照范成大《桂海虞衡志》輯蠻獠見聞，在由桂林到蜀中半年途中完成，留作紀念「蓋以信予之不鄙夷其民…而猶勿忘之也」的風土記錄編成，風土記更易示人。這一類行記在寫作當下的動機，與日後作者從事全集的編纂時，是如何看待這一類作品？在范成大的《范石湖集》中這些著作是另自成集，不編入全集。《入蜀記》則或收之、或另行之，有此兩套系統。范成大《攬轡錄》與樓鑰《北行日錄》，均為使金所作，這一類作品或許有其述職、查考情報所需，在當時是否能公開結集出版，值得注意。范陸兩人行記雖以日



記體為之，然如四庫提要所云：「序次頗古雅」、可能為日後「追加刪潤而成者。」比照周必大《隆興癸未省歸廬陵日記》、《乾道丁亥泛舟游山錄》、《乾道壬辰南歸錄》等漫記道途人事，范陸兩人作品雅潔許多，周必大日記中「紛然不暇記」語，其實是日記體面對的情形，而比照之下，可見范陸二人之作為結集的準備。

#### 4 詞譜の発展と唐宋詞研究

立命館大学 萩原 正樹

十五世紀末頃から登場した詞譜は、単なる作詞の参考書としてだけでなく、詞牌や詞体の研究書的な性格を本来有しており、詞譜の発展に伴い、唐宋詞はその体例や分句、分調、四声などが比較考察されるべき対象として明確に意識され、受容されるに至ったと言えるだろう。詞譜が詞牌を分類したり、詞体を校訂することによって、従来は不明であった詞の内容が明らかになったり、作者の誤りが正されるようなこともあったのである。この点で殊に大きな成果を挙げたのが、清康熙二十六（一六八七）年に刊行された万樹の『詞律』であった。『詞律』の指摘が無かったならば、正確には受容できなかった作品の数は五十首や百首ではとどまらないであろう。『詞律』の登場によって、詞牌研究は従来とは別の次元に到達したと言っても過言ではない。

発表では、『詞律』の詞体校訂の具体例を稍しく挙げて『詞律』以前の諸詞譜とはいかに異なるかを示し、詞を正確に受容しようとした万樹の苦心の跡を振り返りたい。ただ資料的な限界もあって、『詞律』に多くの誤りや遺漏があることも事実である。後半では『詞律』以降の詞牌研究に触れながら、「詞の正確な受容」が現代においてもなお重要な研究テーマであることを示したい。

— 以上 —